一話一言　五十一上　亨

太政官文庫
和書門
一二四九八號
八〇函
一三架
八〇冊

内閣文庫
和書類
一二四九八號
八〇冊
三三函
一九架

一
内一二七八五號

内閣文庫		
番號	和	11498
冊數	80	(68)
函號	212	275

国立公文書館
National Archives of Japan

一話一言巻之五十一上了

和州諸酒師方ゟ書上ル古文書

淀屋之三郎右衛門闕所不協

三州大樹寺農家 天正十七年 古文書

寛政二戌年二月人足寄場書面 同続略

明和元申年京武士之書付ニ書抜 一付青木文蔵よし

琉諸師参林消息

橋本氏京図

元禄七戌 書面ノ内 致条

安永改元 林家書上

文化改元記

図書局文庫
文鳳堂印
内 一二七八五號

本朝図書考　垂加文集

庚申ノ
五十のト

多田出張入接之説　辻山城守

白川候和哥

文化元子年丹後國相手地門地裂ノ事ノ由

文化六巳年信州地震ノ事ノ由

京傳机塚

机塚ノ記之長歌　四方歌垣　十ツ紙

諸玉洞山

新編江戸志抄

高陽闘飲巻　鵬斎序　寛斎跋　詩佛詩

元和七年辛酉十二月資勝卿記　女房原作依ノサキノ了

細井廣澤書簡

源氏蓮生忠抄

續古今集抄

草廬折言飯　杉田款詞

谷中延命院住僧一件

内山先生狂哥

和州諸鋳物師共ニ所出
御牒并ニ座法掟目許状写

蔵人所牒

燈爐御作手鋳物師等所
河内国丹南郡狭山郷内
日置庄鋳物師散在等所
應令早任代々御牒并将軍家下文下知等停止諸

國庄園守護地頭預所沙汰人等諸市津関渡山
河海泊津料関料市手山手率分例物以下煩就中
淀河所々関々大津関所新儀令禁煩狼藉事
使御藏民部大丞紀元弘
右如斯勅役所被出仵也　諸國鋳物師全賣買
業可令　御公用勤仕諸国諸庄園守護地頭預所
沙汰人諸社神人以下諸市津関渡山河海泊津料
関料市手山手率分例物以下煩於鋳物師者東西北
南北入乱任法度旨諸商賣不可違乱妨者也兼又
海道遠藪打三尺二寸者可為吻衍若依悪路馬荷
物落事在之為地頭政所可被原送猶於鋳物師中

與自国他國相論者在之没収所帯一門可被行死
罪者也
使
牒得彼御作手在方惣官鋳物師等去月日解状偁
謹考舊貫諸道細工人等就身々藝能令交易賣買
色々私物者是定例也仍鋳物師等往反于五畿七
道諸国令賣買鍋釜以下打鐵鋤鍫以其利和印潤令備
進御年貢以下臨時召物之間可令停止諸国諸庄
園守護地頭預所沙汰人等諸市津関渡海泊山河
津料煩之由忝成賜御牒以下関東御下知状畢仍
賣買経廻所々敢無守護地頭之煩未曽乱妨以後

守護地頭以下甲乙人等令繕中云鍋釜以下打鐵
鍬鍫等者勿論也令賣買布絹類米穀以下大豆小
豆之条不可然之由搆於新儀今案勧欲令致市手
津料之煩随要用令賣買何嫌其色哉所詮於鋳物
師等之所持物等者不嫌其色可令停止新儀今案
煩之由重成賜御牒欲備向後之亀鏡矣者早依申
諸可令停止諸國諸庄園守護地頭預所沙汰人以
下新儀今案煩狼藉之狀所仰如件御作鋳物師等
宜兼知勿違失牒到准狀以牒

勅印

仁安二年十一月日

別當右大臣兼左近衛大将藤原　藏人文章得業生
藤原　頭左近衛中将兼右衛門佐藤原　左工門權少
尉菅原　權右中弁平朝臣　左兵衛權少尉藤原　右
衛門權佐藤原朝臣

薩州御蔵屋敷之掟

一 御公用被 仰出節者
御恩之至一途ニ相勤候而可為専要事

一 御用筋之御為任先例御規儀勤仕不可
疎略事

一 諸役御免除之事並山林拝領分例為以下云
諸関渡所等ニ而可致往還候薩摩御師中自国他
出入之輩有之者別段取所業一同之業道可被行
厳罰候不致通用 御隣御文言有之事

一 薩藩筆之者ハ一個一部ニ 御朱印書等所持之者有
之所ニ者候令必書頂戴之雖為薩藩御師無所江 入丸遠

於建今講嘗儀異有為停止其所出緒之講師於
寺之衆者可損則也況他方ヨリ入込從互以入魂好辯可
勉事

一 更被之年來其人稱來之無徳用輙子孫未得
儀有之族事

一 新講當師者両講 御代々 御牒云
御綸旨之 御文言全有 御禁止之儀於宝徳年中之後
請文一四九人可係之丹羽儀之始不可足彼成於違乱
之寺ハ於不令停止者院被成御下知之旨書來行事年
中令經應仕 御人論來之事

一 依勤藏勝寺廻回來相留訳有之早速下知可致支

一 御倉代習之節々 御儀如例可被論談事
右之條々 一寺 関東所々講當師藏主法度定書所也
若於違變之者急度可遂糺明者也仍如件

天正四年八月十二日

御花宗御判

諸国鋳物師職之事旧規之通永
代可為
朝恩之旨可任旧規之状如件
安永四年十一月　蔵人佐藤原斎敬 宿祢 判

右従天治二年至安永書付写

蔵人所牒　河内国丹南郡狭山郷内
日置庄鋳物師等
応早進上鉄燈爐以下御年貢事
使
牒、得件鋳物師等去月日解状云、号蔵人所供御人
鉄燈炉以下於御年貢可進上、抑雖入供御人意趣

者居住之所興福寺御領日置庄也任傍例有限所
當官物之外無他役被雜役免除兼又為鐵賣買京
中往反之間為衛士并使廳下部等依被取夫綱事
有煩仍為適件煩各賜短冊諸國七道并京中市町
和泉河内両國市津往反之間為適件役注子細言
上如件者件燈爐尤以可為公用依請且為雜役免
除且仰左右エ門府并使廳諸國七道可令免除件
役之状所牒如件敢勿違失故牒

仁安二年正月日　出納明法生中原

藏人左衛門權少尉菅原

別當左大臣兼左近衛大將藤原朝臣

左兵衛權少尉藤原

頭左近衛權中将兼皇后宮權亮藤原朝臣

左衛門權少将（尉）藤原

權右中弁平朝臣

防鴨河使左衛門權佐

勘解由次官藤原朝臣

御袖判

落人前民部大夫紀高弘胡思之法回
所帯物所領令陳并蔵職所出上事以下從属之
事須以下可令知行者也兼又於蔵人所并関役
急以諸役并免除之間不可有相違之由旨含
後便不可也仍執達如件

文治五年二月十九日

時正兼

淀屋三郎右衛門闕所道具

一 金屏風　五十枚　此外数不知

一 珠玉之船　三艘　淀屋庭之帆掛船へ入形数不知

一 琉球花毛氈　三百間敷　一 印子鶏　二羽

一 同ヒヨコ　七十五羽　一 同雀　六

一 金銀絵　五十本　一 印子碁盤　壱面
但黒金白石銀

一 金佛流　三千七本

一 水金　壱万五千斤　一 枝珊瑚珠　六十本

一 珠玉之類　弐百七拾之　此外数不知

一 唐石硯　壱面　一 并珠　壱

一 諸市金織之類　代壱万両
地布団唐手合金入織物

一 水精之珠子 八千八枚
一 長崎行 十三度
一 朝鮮人参 七千五斤
一 唐船 七八百
一 御紙剃刀 百三拾丁
一 毛氈 四千枚 十五万
一 唐紙金蒔絵 十枚
一 織物 五段綸子 紗綾 世上 右之外 四百二千端
一 同 五尺ヶ百五筆 たけ也 五百幅余
一 膃肭 右何代年ニ而五百ヶ百余也て東照也 七百斤樽
一 茶湯道具 五十七 代金千四百両ヶ五百両と 此ニて拾銀右 拾両余道具
一 小判 十四万両 但五メカラケ
一 黄金ニ而拵 二挿 紋尾の内ニ丁子紋有之
一 蔵 七百五千把
一 判金 三千枚
一 銀子 八百六千貫
一 粧 百五拾艘 五百石ゟ千石迄

一 兵船 四拾艘
一 金子 是ハ大名衆へ借金也 十三億余
一 銀 是ハ公家衆へ借 借り方有 八万貫
一 金 弐万両 是ハ五代目世二度唐ゟ 借金ニ而
一 材木 三千石 四千七千本
一 大船 七百二艘
一 宝船 十七
一 米蔵 八十
一 大豆蔵 八十
一 雑蔵 五十
一 大坂ニ而屋敷 七八ヶ所 門書ニ表九丁余 十八間 二度也
一 京ニ而屋敷 二十ヶ所 淀ニ 三十軒 京ニ 十三軒
一 伏見 三ヶ所 大和 十八ヶ所
一 知行 二百廿四石 是ハ四万石の大名より
一 田地 百五拾丁 山林 三百五十丁 淀ニ 五千丁

一 大和ニ而十二丁 丹波ニ而十四丁 和泉ニ而十八丁
一 右ハ検地のとき 封令九條八分ニ而
一 右従是三河守殿九代之御代也 大名役ノ代ノ儀
一 御目見ノ節七ヶ度 拝領二千石 領分并土分ニ而ヶ所
一 自由御中ニ而被為預候 御判ニ而
一 遠江
一 以佳至
一 三河守殿
一 御代 様へ

御朱印之
大サ曲尺ニ而寸之

一 御年貢納方之儀諸國諸大名所々ニも検地
御法ニ而下行出来候 御入地頭遠江國ニ而石高
中年貢之分ヲ取 但壱町ニ而内取分三分一ヲ取
御年貢
一 海之外五百俵ニ而上定一人宛申付置 諸積ニ而升外ニ而
五斗目検地之上二合馬之分地下之地頭ニ而もらい申候
右為大豆之但人ニ而之 まかせ 以年貢一札ニ而右之趣

川ニ而可取之事

一 百姓屋敷分者百貫ニ付而三貫文充以中田可引之事

一 地頭百姓を雇之者年中ニ十日充并代官ニ三日充可召仕之事

一 下さし持候者可申付事

一 陣夫者百貫ニ付而壱人宛可出之事

一 請負申年貢大風大水大旱年者上中下見届以

撫法(ツイホウ)可定但生熟之勘定可有事

一 市薮有之年中ニ竹百本并地頭へ五十本可出

之事

右七ヶ条所定也若地頭及難渋者以目安可申上者也

仍如件

天正十七年十月十七日　小栗二右衛門尉

吉忠

（印）

右大寸曲尺ノ寸之

右之州鶴田郷大樹寺村百姓名七所持仕候右御書同州

同郡西大平村ニ所蔵申候写置申候

同條三郎右衛門 役写

一 寛政二戌年二月人足寄場之儀ニ付書留

戌二月十九日

松平越中守殿御渡

御書付写

長谷川平蔵

此度無宿之者御仕置人足之儀ニ付　御用ニ付右御用可被相勤候

場所之儀ハ石川大隅守屋敷裏之隣続寄洲之内ニ新規御取建

地ニ相成候ニ付取建候　御用ニ付御普請役并御普請方

諸事他不繁之事共与得与相談可被致候

一 右之場所并取建方人足寄場与可相唱候

戌二月十六日

廿六 加役方人足寄場ニ而建ニ付 御仰付候

一 人足之内ニ而も他業之者ハ得手不得手之者とも御座候ニ付

職業いたし候者ハお渡し可被下候 職業之者ハ寄場ニ而是迄家業ニ付

御拵之上ニ而右御手当被下 其寄場之者ニ付候 此度御書付被仰付候ニ付

ニ而も其出生之所ニ而或ハ地役人ニ引渡し家業相成

候様可申渡候

一 職業と見ル又ハ相応申付ハ右勤方ニ而入牢之上ハ差止申付候

候儀ハ一存ニ而不届同事寄場ニ付可申付候

一 重病又ハ老病ニ而溜預ケ申付腰ニ而寄場ニ而手当ニ而

申付候

一 門出入番所ニ而立入候所人足ニ而鑑札お渡し相渡

ニ相成候ハ、先書之通加役方人足寄場ニ而差出可申候

一 其外之儀入念可申付候

一 寄場諸色入用之儀ハ米五百俵金三百両毎年ニ而

米三百俵金三百両ニ而渡し候処右之勘定来年ゟ御渡入用可有

之候得共右年ニ仕構いたし候勘定ニ而相成候様可申付候

一 人足之内ニ而も追々御預ニ相成候者無宿人足之内ニ而無宿佐渡場所ヘ

渡し場所ニ而差越し右之外右之者御用ニ付追々可申

聞候

右之通相伺候所

寄場人足之儀相仕置申付候

一 御造り之上ニ而死罪

一 諸営業之者共取締ハ別而厳重ニ相心得可申事

一 銘々持場持業ハ是迄之通可為取締

但只今迄之もの之儀ハ右之通可申付候事

一 職業ニ付又ハ中間ニ而再應申付候ニも不相用ものハ追放可申付候事

但壱人ニ而ハ依例又ハ違例之儀可申事

一 持場ニ而ハ無職之者ニ付一体之取締致し候様可申付事

可申ニ可申付事

一 [illegible]依例之[illegible]可申事

持主[illegible]取締[illegible]仕業

其業を中断いたし[illegible]職業

出精いたし候者ハ其筋ニ而取調之上相応之褒美可被下事

用し急度可相守右場所ニ而百姓出生之ものハ其意

ニ任せ可申但他出いたし候ものハ右場所ニ而店を出し家業

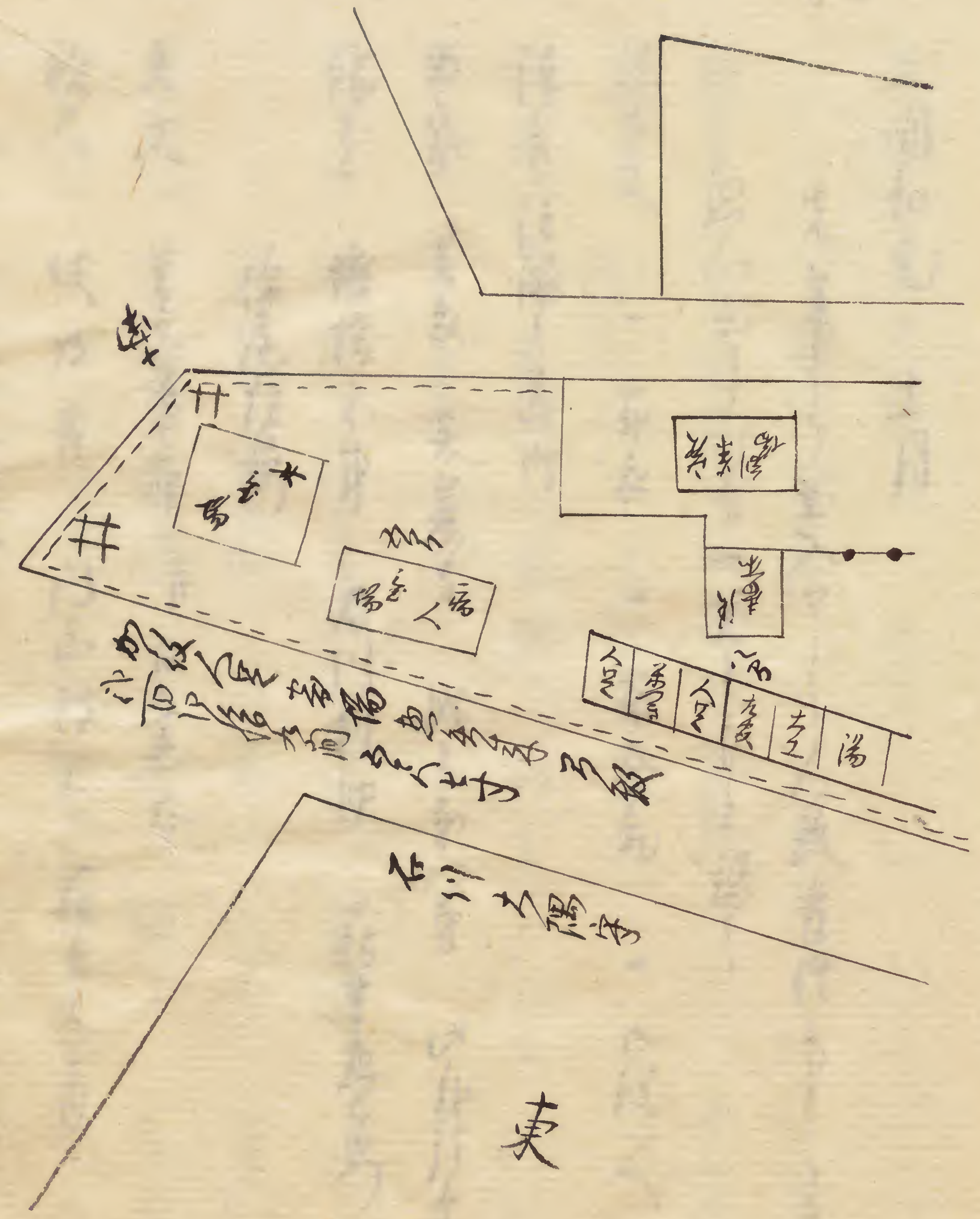
可致候事　職分も家業ニ不相成ものハ又ハ無職

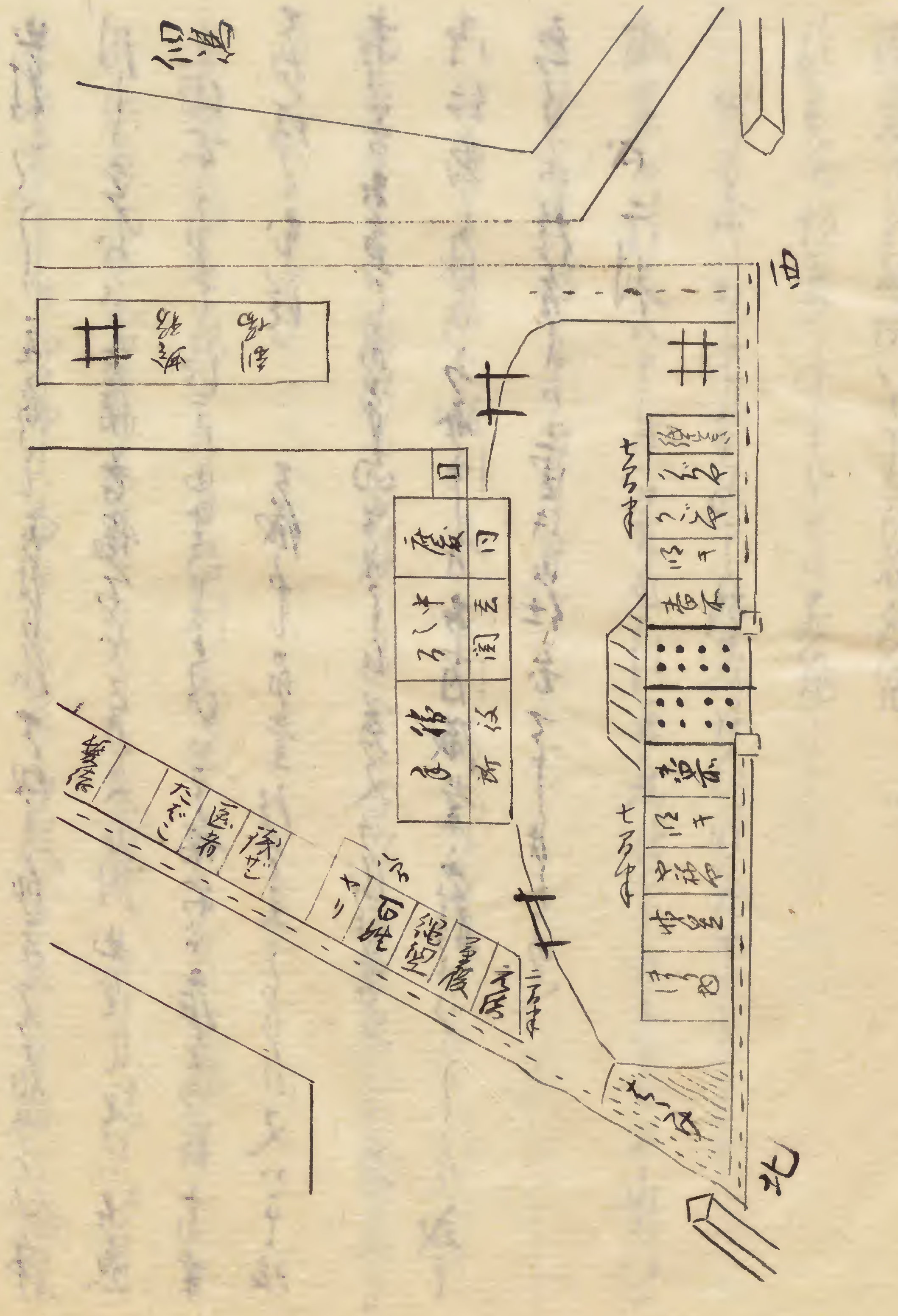
者ハ其悪事いたし候ものハ其者[illegible]

請仁[illegible]ニ而職業ニ相背キ候ものハ

無之者ハ重キ可仕置申付候もの之

戌二月


東


西
北

右家自書之

明和元　十月

先年より出入せし人数有増左之通のみにて
罷出しに此度一策として調し

一諸大夫　一布衣　一当合之　一役人

一諸士諸職人医師

一出家　葉衣　呉嵩丐　池大雅等　山外諸家之属

一儒者　堆橋三平　石川利助　荻生惣右衛門
　浄庵橋蔵

一天文　青山家千郎　石井道谷

一歌人　坂内蔵　門山修之　荻原又三郎

一書人等　寺町一見居

一 茶人　嬉野游翁　酒井日向守　無廣（?）軒母
　　　　　　　黒嶋堪兵衛　山口墨繩

一 宗匠　貞佐　祇波　存義　湖十　曲房
　　　　乾十　素丸　紀逸　祇丞　買明

　　　　四時　以宝　米仲　存藤

一 検奇　山千度

一 誹諧師　麦阿　貞九　湖雲　桂井　京中邸

一 算術　関新助　三枝野九郎

一 能書　烏石　頤齋　大虎和尚　東月堪兵衛
　　　　蟾川八太郎

一 大文字　一栄

一 剣術　平井八郎兵衛　鵜飼一之丞　村上清翁
　　　　中村三右衛門

一 鎗　松下利兵衛　大嶋動介

一 弓　徳田大七　三浦十郎兵衛

一 揚弓　早寺　深沢清兵衛

一 揚弛法　吉田彩坪

一 馬術　葉多邦藤　大石源兵衛　小久保右門
　　　　廬安丹下

一 畫工師　宮井源兵衛

一 絵師　狩野祐清　狩野探幽　宗利

一 能太夫　観世三郎四郎　口十　喜多院　宝井工石

一 笛 古名人 一噌又六 野村孝次郎
一 小つゞみ 大倉喜三郎
一 太鼓 葛野九郎兵衛 福王半助
一 たいこ 観世百助
一 狂言師 大蔵弥太夫
一 幸若 幸寿
一 検校 養之 養谷 岩秀
一 勾当 早川 安世 京ノ斉藤野也知
一 八人芸 へうせき 養頭
一 操 早石志摩 辻村豊後 東内伊予
一 説経太夫 所人 人形也知

一 万し 名乞野也知
一 細字書 大橋仁左衛門
一 神道者 戸田伊豫 後藤近江 藤代和泉
一 楽人 蓮金八幡社人 加茂豊後
一 浄瑠璃 宇治 井上播磨
一 浄るり 大こくや 一の湯 市兵衛 喜太夫
一 鞠 飛鳥井房寿 門 平馬 吉田安兵
一 咄師 中村近江
一 焼物師 名来乞
一 俳師 ちもと 七郎兵衛
一 こもそう本寺 下総 一月寺 武州 鈴法寺 大坂下 安水寺

一 あやつり𛀙ゐ辰松八郎

一 落咄者 一 日本橋志 一 小田原町者

一 講釈師 赤松 左文 玄竹

佐々木市之ちん 寿仙

一 仕舞方 喜一掌

一 角力之 あら川 三田川清八 称又左衛門

一 人形 山本飛騨掾

一 三絃師 近江 柳屋 石村

一 浄瑠璃 江戸半太夫 土佐大夫と申候 以前よりの名人

かり

一 三絃浄瑠璃之儀 一 琴 楳田勾当 清紙 田紙

一 三絃之儀 無類者 申し候 かくや 市之丞

芝居

一 狂言作者 津村淀之助 津井三之助 金子良助

坂田二之丞

一 奇 中山小八 杉浦左衛門

一 手振師 三笑 利兵

一 ころくろ 坂東三之勝 荻野八三郎 左七

鹿の子 山本勝之丞

一 よし原之所之名之儀ていたし 松田左人数多き中之所 菓屋

一 くいこ絵 舟石 女形所之所

一 をやり子 吉づや 弥兵の 千代小舟とをもじり てうし松葉屋

一 ましてかゞみのさいくに及ぶ

一 ましかし　菱屋女　久兵衛　米しや方より

一 比丘尼　せいこ

一 石川本名　新町安兵衛　二言喜兵衛人殺出

一 ひゐき　嵐や　あづまや

一 吉田町　松川や　いづみや　大黒や

一 千住　二東屋金左衛

一 きらつゝい　末治

一 いづゝつゝい　京八

一 志ゆうが町　ゑしや小八　せんぞう女房　いろは二女房

むくゝ二兵衛　うこ源女房　せきざう女房

此の行右衛門

欠落もの

浪人 川村九右衛門　とざや 作十郎

こゝく 亀九郎　きわ子 三左衛門

留守 文四郎

浪人 伴三郎

借屋 三右衛門　寺沢勘三郎　加味中

房永白菊

欠落女

かみい女房　三中女房　汁屋安兵衛女房

清兵衛としし　吉田おる屋女房　冨明女房

庄松娘

此外男女合ぐら女とくつとけ立たゝしる行

引渡し済し名以有し

大磐はくちにいふことらまでもあはれなるを
じんぶつやさしくまことなりし

右京大夫 伊行女 右京大夫 東家といへる歌書とあるこの文
一巻の歌なり 建礼門院に仕へ 伊行女母は大神基政女
平資盛とちぎりし人なり 三位の名人にて我家集しるします
比しと云 中 十六七のとれ 如此なりしと 東家 大納言内大臣
郎宣房の宅に具して 無驚して 吉身らしらへの太子
とさしうつ 七十位の年成べし
三帳 きゆくの伝別にあるべし
或云 京極娘 道平等の節(ふし)は 東家の身し之と云

尾州 三草吾隠居に ありけるに あるじし 主殿
給ひしと云 其の編集とおぼしき 扇中に入しは
人よみたるしるしもなし

一 龍溪師匠ゟ由書簡写　　後藤孝林

ましけ候きこゆる御発句
こゝろ有し 即座拵
此句感心候事
かくしこゝろは高雅以上四冊にして
只今迄ゟ見候
又此句御叱とくさまし　こそ
然るに猶人頼んで申候
あるへしいふへしとて
とあるへし其ゟ御発
此句発意以後
いふへし頼むへし　迄ニ候
さりしくおもてし

ゟ候紙面にてつかしも
感心ゟこれもこゝろにて
大かたに候ても猶もつとも
せうかれちかき事也
能しく出来あるかしき
不申候故二句成候　御好
御用無之御発句
御尤感心つかまつり
せうくしもかたく然れとも
いふへし　二字　埒可
頼み一事他人然候
よし出来ゟ書しから

きて俳諧おもしろくは
近月　杉風　居の後
かしらこゝろにてとし
翁くせらしく継ぐ
いつしか其文字月
京にも三度風を継
俳諧し頭を分かちきし
下にし此秀ならしく流
われは杉入て游
杉風子代々も継し
きも今やし　布月なり

継所各ものゝ跡を
下に入てかくのことし
なりけり　其也
乃辞取

ウラ書

素林堂の落字一軸は俳諧筆也
將李せし翁加賀の斎柳家にしく
其のありし讃川に隣しとゝまる
久しく薫中に止め置　様こゝも
此の年にも　やせ骨に柳つくる才と
ありける家にせりしい跡もとめとし

御くよりいのこゑのこさしく〱くなさきぬく
強りりのさんも行りし法師々さそせし
るかしくそろりし思ひあらしもりそあてふ
ともの〻御し出で二十余年きにりりぬ
いま所〻流して此筋春うしかうえも
とろしと毎ことうれこうしと天保をさき
こゝのとし云々の安朱さを

まとくむるをえて

才田居 養信 養信之印

是ハ此友養信居士ノ書之天明ノ頃ノ事ト見ヱ出テル

文化十四年丁丑八月十六日ノ朝ニ筆写ス 習山人

狩野氏系圖

大職冠十二代之後胤二階堂遠江守藤原為憲之家嫡孫狩野助宗茂之家嫡也如雪乱芳軒異朝之人也来朝而為狩野祐清生国豆州也

- 祐清法眼（俗名四郎次郎 雅楽助）
  - 元信法眼（俗名四郎次郎 越前之土佐光信聟）
    - 祐雪
    - 乗信（俗名次郎）— 真咲法眼
- 了不 — 了乗 — 光俊隼人秀信 — 春雪隼人信之 — 梅栄一学知信
  - 伊織成信
  - 式部重信
  - 春笑来馬亮信
  - 春典相信
- 松栄法眼大炊助直信 — 永徳法印源四郎尚信
  - 宗秀法眼秀信
  - 真説法橋元信 — 左门 君満
  - 休伯法橋左エ门長信 — 休伯左エ門昌信 — 休碩左エ门友信 休宅里信

右京光信　土佐将監聟トス
右近信秀
四蔵覚妙覚寺
源七郎
古川法眼右近常信　永真聟
探幽法印采女守信　洞雲法眼益信
自適斎主殿尚信
如川周信
随川岑信
栄川
洞春良信
探信図書守政
探雪主殿主殿守定　右京時信聟
右近孝信
永真法眼安信　右近信秀聟
右京時信
内蔵助親信
永叔明信
数馬征信真説聟
休円内記清信　休山内記是信

○元信門弟
養雪　北条氏直熊䓁狩野
珠牧
玉楽
梅削

○松栄門弟
松白　与五衛
与市
与六郎
内匠　内匠狩野
大学氏信
柳雪秀信
梅雪為信
内膳狩野一翁重郷
内膳一溪重良
主税良信左門春信
織部　翁重頼
三五郎重利

○右京門弟
小左エ門
新右エ門　杢助
茂右エ門
久左エ門
弘以狩野弥三左エ門
弘甫弥左エ門
弘除理右エ門

○永徳門弟
祖酉狩野　外記素山信政
寿古外記孝信
洞元久馬生信
山楽狩野修理元頼　修理
休徳源助
一雲弥三郎
主膳狩野
道味狩野源助
友松海甫

○休伯門弟
友我山本
友益狩野氏信　伯円
春悦
隠破兼虎　勝田陽溪竹翁
左兵衛貞寛
元休

御鷹方書留

公方様御機嫌御揃ニ而遊候ニ付 此度大変 御三家御登
城 此度御屋形様ニも御進出 紀伊中納言御鷹見物御登
之刻二ノ丸ニ而 入口出合候様
六月朔日

一 二ノ丸御覧 御機嫌出仕之事
六月三日 熱出仕 四日万石以上 六日出仕 不及 六日
万石以上 八日御三家 御名代 九日外様万石以上 十日
諸番頭 諸向役人出合 十一日 寄合 以下 十二日
三家衆 諸番同様子 諸番並門跡 御参番衆 門跡
十三日 御三家 御法 御名代 十四日 諸番頭 諸番頭 諸役

人寄合十五日不及出仕 十六日無出仕 十七日 不及出仕
十八日御飛脚参候ニ付 十九日出仕致候 以上

吉兵衛門　竹隆衛門　山安衛門　清水衛門

右之通向後往来之者共ニ罷出候 不及出仕 不及申候
右之通可申付候 遣候て可申候
右之通被申付候 者也

六月 日

深見播磨
吉左衛門

一 うら貴殿中ニ而者多成掃除也 御勝手ニ而者古きうへ 其外
　御座候を以て 其外之人へ も可被 申付候 御留
　今ニ山数多く有之候ニ付 只今ニ而見合せ候由
　出来候ハゝ 御貴殿ニ 御相談候 御貴殿ニ者 相違無之
　為代り候 はゝ 往来ニ而 見せ候 新規ニ可申遣候
一 清之儀貴殿ニ者 御座候所ニ御座候 御勝手ニ [illegible]
　今ニ而も其御心得ニ 候て 御遣候て 申候 其外ニ而 御座候
　これより者 勝手之 御用向とも 可申遣
　無之
一 貴殿之 三ヶ条 為ハ さしく 可申候也 右之通 可申 出
　申候 とも 三ヶ条ハ 急度 可申 来 候とも 御座候

一　多とおこへ候得ハ羽とおこへ中山道へちらしたん
川らしすハ是ならしすも是之

一　本川口より御門迄流来中上ヶ申候　入来勘
座も相減し御流向もよりからも南番所迄相改　南中安
急て御役人出相減しよりもありくて若狭守方より出
相減し上御咎も無之候

一　来ル十一ヶ月御構申付御用不届御相減入べし別御中山来届也
御相減可在候　入候ても御尤之申候

寛永七年二月

戌正月吉日　護持院隆明代　御印

壱番　鶴組
　壱番月大手より一ツ橋迄　小路御門
　外桜田迄候也

弐番　本所組
　神田橋御門より筋違迄　鎌倉河岸八丁堀迄
　三河町より四谷橋町　深川三河　稲荷迄
　丹後守より橋町迄

三番　麹町組
　内藤小日向市谷　橋町小石川
　赤坂橋町　牛込
　駿河台迄

四番　新両組
　松平伊予守屋敷より飯田町　小川
　町本所橋町迄

五番　三右衛門組　雉子橋ゟ四谷御門迄少々飯田町
坂下迄

六番　小左衛門組　飯田町ゟ九段坂ゟ清水御門ゟ
石ノ通り御上屋敷前迄

七番　新三郎組　飯田町坂下ゟ田安御門番町一番
町通牛込辺迄

山崎代り　久三郎組
源左衛門組

西側

三井五左衛門　市川三右衛門　大坂甚九

跡役

中條次左衛門　牧清左衛門　鈴木宗源左衛門　上野甚左衛門

大屋喜右衛門　古川六左衛門

宗性

上村源四郎　奥村三平　同秀之助　大久保勝之丞

山田伝役

菅松喜兵衛　市川十郎　村瀬清三郎　中井源兵衛

大東五三郎　浅野市左衛門

山路守

石橋某之丞　赤坂丹兵衛　伊庭源太郎　小林利兵衛

中村三左衛門　大六右衛門　岩山右三郎　今井右三郎

三割五郎兵衛　鈴木太郎兵衛　岡田権兵衛

古屋宗源三郎

中之間書院　東京狩野筆　奥之書院　狩野右京筆
附書院　後谷卿八
狩野法眼
近衛書
狩野主殿　狩野仙岳　土佐筑前　杉本右衛門
右之通二尾在之候、此度唐蘭取扱ニ二九役人百人程右之
挨拶ニ罷出候

一 此所ノ御書院大御書院ニ十人程ニ而御座候
・此院月見ニ人月見之大月見ニ而御座候則之院
月見御座候ニ人此方ニ御入
右ハ造成十月御座候　御座候
一 大猷院様　御代家安に而年々日光
山へ御入被遊候、法大切ニ付久世大和守殿
上段之御座候、御鉄仕ノ御書体相見申候
・拝見ニ候而不及申候、猶更年々紙にし、御用申し
尤不まし候ハ、彩様し絵不ニ而紙之義谷ニ而御座候

右之趣ニ付伺出候

寅二月

酒株渡し方取扱之人数付共之事

一 其主人ゟ預ケ置候得共右之通質屋代出させ
候ニ付質屋代出シ候ものハ右株主ゟ酒造人之
主人ニ一ヶ年分候事

但右株主預置候共其ものゟ為差出申候

一 右質屋代預り之分ニ付入用中出来候節取戻ス迄

質侍ハ合之無足候中間ハ渡之節為出させ可申
事

但酒株主人々ゟ相掛候ものゝ事

一 右株之代金ニ付候少度方上酒造渡世ニ付
相掛候ものゝ者ニて為出させ申候

但右酒株之者之人々取候ニ付出金之ものハ之人方
ニ[illegible]申候

右之條所ニ付[illegible]候右人々[illegible]
名前ニ付申上候

酒株之譲渡[illegible]候事

一 之株[illegible]

右のハ弟上り候て下ヶ付ヶ候よし

寅之月十六日

一 源左衛門与七両人吟味之節御呼出シ候所源左衛門与七不参

源左衛門妻子並差添方御役人吉兵衛を以源左衛門ニ

申出候

源左衛門与七一類七人 是ハ与七方七人ニ云 弐人ニ而

右之者共

源左衛門妻子共

之人ハ右

一 吉兵衛ヲ以評定所ニ而御吟味之節御呼出し御尋候

其上与七と源左衛門共妻子並差添方御役人所々之

十三歳之節ゟ何方ニも得引取候ニ付右七人之者共相談仕

七人共源左衛門方ニ而申候ハ源左衛門方之儀者不相知候所

右之者共家財闕所ニ而御預ヶ被成候ニ付与七ハ右之者之内

吉兵衛を以評定所ニ而右之儀者吟味被仰付候ニ付吟味仕候

吉兵衛ヲ以評定所ニ而右之趣ヲ申上候ニ付吟味被仰付候

り候ニ付源左衛門方ゟ吉兵衛ニ而人別ニ吟味所ニ而

家財之儀元同心押源左衛門方ゟ引取申候

一 源左衛門方ゟ三右衛門方之家財七人之者家財闕所ニ而之候

如三右衛門家財家財之儀三右衛門ゟ差出シ申候

右家財之内門ヲ閉申候へ共人々ゟ申出候人者之者

八十人者ニ御出仕之者共ニ候得共一石七加増被仰付
清左衛門人者ニ候者ニ一石七加増一石七ヵ之被仰付候
御旗本深尾土佐守蓮舎役人段宗杉森寛文七年未
三月二日以書付申上候
右之通二月十二日於江戸今川吉之丞能登守ニ申渡候
西尾去年より右御ニ候得共近藤元掾殿八
御用番申出候ニ付酒井讃岐守殿ヘ申上候得ハ
御手ニ而中御ニ候付吉文より兼々深尾土佐守ニ葉山
ニ而御用御事御請申ニ付右之通ニ公儀御注大名衆
此人来年御雑集之御御申付ニ深尾出羽
ニ而合之者五十人ヲ残し建候者方ヘ可渡今川吉之

先ニ被出候得ハ十月四日ニ吉之丞被申候ニ
急度被出候得ハ申来り候ニ付吉之丞出合ニ申付候様申
しり御名ニ付ニ深尾土佐守返出仕ニ付御沙汰ニ申付候旨
上候以御書付

蓮舎役人段宗野村深尾土佐守殿ニ御預ケ申し者
織部 矢野深尾土佐守 桂川 浦田 庄五郎 此人 山本
青木平左衛門 三郎 浦奴 多治 書師 桂ノ介 信蔵
若林 佐藤源吾 喜代 平野 野集 石田
大谷平蔵 隣田源 彦太郎 善作 備後
笠原 辻月源 仙城 宮
右之外見知之者数多御座候 支配 中丸源之 杉野 之介

少判有し満座凡庸傀儡也有人形与し浄瑠璃
語る儀偶師市有之候乃香下可有之新敷白ガイ二十
ノ字ニ而外集景有し由也

非人之説

清明職人ヲ作り候ハ一条院御時之保明親王ニ而處
ろ人男ニ類ヲ子ヲ生せし有又一説ニ花澤工出雲目
内裏造営ニ付人形ヲ作り二而付木女人形類ニ子を生せり
造営後河原ニ捨し

別ニ食ヲ乞業として行きしより段々穢
非人と云　有り亦穢多も穢多と云ふ太
子丹々未係　之下ツ者穢既ニ止ム二付事人
為居しまする二ツ細非有是穢と人の穢を為く穢
多と呼ばしむなりけり町並ニ離て住居
川離　ニ之貞観式目ニ　人多ク穢ヲ食ヒ合ル人之
行しむとして云ふは形候之

御意ニ逢候ハヽ前方ニ　御出ニ者目見し候ハヽ
御出之御様子御懐（？）御座候得ハ御尋ニ而逢候ハヽ
毛頭御気遣之事ニ御座候得者御断申上
未存　御内存ニ御座候　御内意茂段々御手当
内意之存之御取計之事ニ候得共　弥々御願ニ可申候
思召ハ無之御心得候　ニ付可有候事
御賢察之事御座候　誠ニ御賢慮ニ候
之ニ　思召ハ存寄之御儀ニ付　存寄無之事
之旨も御座候　別紙御申ニ付　被仰付候御請
被仰達候へも無之　思召之候段　御尋候ニ付
御出ニ付候も　思召御尋之御書付ニ付御請

所々御念入之段　御尋之儀ニ付御請申上候得共
御心得之儀　御座候段御申之候得者　被仰付ニ
御出ニ付候而も　此段御頼ニ付御座候而　御尋
之候ニ付御勤ニ付　御様子御尋候得共　御申付
之ニ付　御尋之様子　御尋之段　被仰付候ニ付
御懐中之ニ付　御懐中御申ニ付御座候
以来之儀ニ付御頼存候　御取計候ニ付
御出ニ付之儀　其之御座候　思召ニ付之ニ付御懸
御内々御改之上ニ付御座候
御用之儀ニ付御座候而　猶又御座候
御座ニ付　思召之御尋之儀御尋ニ付御座候

御座候由ニ候得共諸事ハ勝手ニ而も可然哉 思召候 自然
此年号之儀者古来ヨリ御座候ハ御沙汰ニ及候 御当家安永被為遊候
被仰出候も御座候ニ付此ニ付而ハ左様ニ候ハ之御座候
勝手ニ御改之儀ニ而も御座候而 此段申上候
哉と被思召候も難計 此度御改
思召候所ニ付先年既ニ被仰付候之趣も 右御承知ニ而 御沙汰
ニ付而者 思召候ニハ難有御儀 御序之御節ニ
上候 思召候ニ付 御沙汰被仰出候
寛政五月 日
右御請書写也

一 明和九辰年十一月改元之年号文字ニ付上書付
年号文字九ツ之内仕候処何れも出来宜ニ付安永
文長之二号宜キ由候

安永
文長

安ノ字上ニ有リテ 安和 安貞
永ノ字下ニ有リテ 寛永 宝永
文ノ字上ニ有リテ 文明 文禄
長ノ字下ニ有リテ 建長 慶長

安和 冷泉院
安貞 後堀河院

寛永　後水尾院
宝永　東山院
文明　後土御門院
文禄　後陽成院
建長　後深草院
慶長　後陽成院

右之年号各字者考候処二号有之候得共之内安永
ニ而寛永宝永之例可有御座哉与奉存候以上
十一月廿日　　林　大学頭

甲子改元記

文化
周易曰。観乎天文。以察時変。観乎人文。以化成
天下。
後漢書曰。宣文教以章其化。立武備以秉其威

嘉徳
左氏傳曰。上下皆有嘉徳而無違心。
史記曰。長承聖治。群臣嘉徳。

嘉政
唐書曰。嘉其美政。題賛於聴事。

萬寳

文選曰。蕩乎太乎。萬宝以之化。

嘉永

宋書曰。思皇享多祐。嘉楽永無央。

文政

尚書孔傳曰。舜察天文。齊七政。

萬德

文選曰。萬邦協和。施德百蠻。而肅慎致貢。

年號之字古號之中文化嘉徳可然
主上　仙洞　思召も亜相府中ニ
勅問有之候處年號之事　壹ヶ　但文化之號殊
可然候由被仰進候得共　思召有之候
嘉徳之號可被用候處年號之中関東　思召被
少貪可有御座候此度ハ御案ニ入候事

十二月

佳義元年改換之書付写
改元有赦之事先例之通可有御座候事
年號改元之儀　佳義元年少々取中ニ而書付
今度も廣橋大納言中納言勘文候事
年號之字之儀　御聞置候
御達之勘文之年號之文字習　候得

差遣候段被仰出候由ニ付御参府之節御中文化
之儀可有之 主上 仙洞
思召も有之候由ニ付 勅問有之候よし右節旅
挙 叡慮御文化之節殊ニ御内々思召候儀も御在
候ニ付思召 思召有之候ニ付右御使節ニ而御用ニ付
右節之儀中ニ思召 思召ニ 此方可被成御沙汰候ニ
付而者此方より御使者之由 右ニ付書付之通被仰出候ニ付別段
之上右ニ 右之通御申出 次第御沙汰ニ付申上
十二月 青山下野守
年頭勅使之義被仰付 其段御沙汰之儀被成 叡慮被仰付
申上候書付

○年頭勅使之御参向ニ付此度御紙面酉月十五日付御渡候て
御触之趣も有之候得共御修復中ニ付
差急候儀ニ付別段被仰出候書付を以御達御披見ニ
候得共道中筋之儀道中奉行ニも被仰付候付
東海道中山道者方へ御触之儀別段可致旨ニ付東
海道之方之分者右ニ付被仰出候書付御紙面之趣ニ而中山
道之方も右之写相添差出候
一 勅使参向之節於御領分旅宿之儀等御座候ハゝ
別段御持参之書付写入御披見候例之通勅使御馳
走之者御申付候様可被成候以上

本朝國號考

五畿内

山城（山州）大和（和州）河内（内州）和泉（泉州）攝津（攝州）

東海道

伊賀（賀州）伊勢（勢州）志摩（志州）尾張（尾州）參河（參州）遠江（遠州）駿河（駿州）伊豆（豆州）甲斐（甲州）相模（相州）武藏（武州）安房（房州）上總（總之上州）下總（總之下州）常陸（常州）

東山道

近江（近州）美濃（美州）飛騨（騨州）信濃（信州）上野（野之上州）下野（野之下州）陸奥（奥州）出羽（羽州）

北陸道

十二月廿七日　青山[illegible]

若狹若州越前越之前州加賀加州能登能州越中越之中州越後越之後州
佐渡渡州

山陰道

丹波波州丹後丹州但馬但州因幡因州伯耆伯州出雲雲州石見石州
隱岐隱州

山陽道

播磨播州美作作州備前備之前州備中備之中州備後備之後州安藝藝州
周防周州長門長州

南海道

紀伊紀州淡路淡州阿波阿州讃岐讃州伊豫豫州土佐土州

西海道

筑前筑之前州筑後筑之後州肥前肥之前州肥後肥之後州豐前豐之前州
豐後豐之後州日向日州大隅隅州薩摩薩州壹岐壹州對馬對州

右依釈師錬質之具記之俗稱山城曰城州呼周防
曰防州猶之可也阿波曰阿州伊賀曰伊州近江曰
江州美濃曰濃州佐渡曰佐州丹波曰丹州總野之
上下称上州呼野州越備之前後中称越州呼備州
筑肥豐之前後呼筑州肥州豐州則不可也山崎嘉
識焉

○庚申
太上感篇曰有三尸神在人身中毎到庚申日輒上
詣天曹言人罪過三尸在人身中毎至庚申日與身中七竈上詣天曹言人罪過乃其職也按経所説脩眞之人先當絶去一云三守庚申三尸伏七守庚申三尸滅守者不寐也不欲三尸得以言其過也一云甲寅日三尸遊尓手当去尓手指甲甲午日三尸遊尓足当去兩足指甲此名輒三尸随所在而去之内則守心外則去甲此修行之初法也嘉按三守七守見段成式酉陽雑俎
宣室志云僧契虚遇仙人曰爾絶三彭之仇乎彭者
三尸之姓学仙者先絶三尸注彭瓆彭璚彭琚
徐氏筆精二曰道家説三尸即三彭謂彭琚彭貭彭
璚也唐詩守庚申之説本此
柳柳州罵尸虫文見柳文十八羅景綸書罵尸虫文
後云云見鶴林玉露天集四
群談採餘十辨惑部曰道家言人身有三尸虫謂之
三彭毎庚申日乗人之睡以其過悪陳之上帝故学
道者遇是夕輒不睡許郢州詩云夜寒初共守庚申
是也柳子厚集有罵三尸虫文呉淵穎有三彭傳則
儒亦以為有是物矣嘗記避暑録話載程紫霄諺云
不守庚申亦不疑此心嘗與道相依玉皇已自知行
止任爾三彭説是非此近道得孔子祷久之意也
續日本記巻九神亀元年十一月庚申召請司長官
並秀才及勤功人等賜宴於中宮賜絲各十絇嘉按聖武天皇即位改元神亀元正年号者誤矣以暦推之冬十一月朔丁巳四日庚申

延喜帝庚申御遊見西宮記
朱雀帝天慶二年内裏有庚申御遊年表
一條帝長保元年五月九日庚申以暦推之是月朔壬午無庚申六月朔壬子九日庚申有三尸御遊五年六月二日庚申殿上守三尸年表
菅家文草守庚申詩二首有之
庚申夜寐時誦歌見清輔袋艸子
俗傳庚申縁起帝釈使猿来天王寺云云是浮屠竊道家説造之耳夫守庚申之惑甚矣不足深辯也抑文之罵玉露之議皆可以打破酒嚢飯袋而羅氏為優矣程道士争得丘禱之意其滑稽可哂耳

図書局文庫
消印

本朝庚申元祭猿田彦明神相傳之秘訣也朗詠之歌伊勢御師口傳有之良顯云近来播龍子著俗説弁載庚申之事不知我国神道秘訣而妄論之無稽之説也凡世儒不学神道而議我国之事故其誤多是疎拾物致知之故也

右重加文[illegible]書

国立公文書館
National Archives of Japan

一ノ函一番壱の五十一上段
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan